

質問 東女医大 山本 直也
 ダーマボンドは長い創にも使えますか。

回答 日大 山口 太平
 ダーマボンドは1本で約10cmの創閉鎖に使用できるため、それ以上の長い創に使う場合、2本以上用いれば可能である。

36. 原因不明の末梢神経麻痺によって生じた下垂手に対する機能再建の経験

新生病院整形外科
 榊原 政裕 (さかきばら まさひろ)
 橋爪 長三

症例：33歳男性，会社員。2000年6月，左上腕前腕に疼痛発生，近医加療も持続，同年11月3日に突然下垂手状態となり，某院の整形外科・神経内科で診療を受けるも原因不明のまま経過。2001年5月17日，紹介にて当科初診す。左手関節自動背屈不能，母～小指の自動伸展不能と下垂手を呈した。知覚障害なく，血液一般・生化学検査も正常。徒手筋力テストでは橈骨神経麻痺に円回内筋4，橈側手根屈筋0，長掌筋0と正中神経麻痺が合併していることが判明した。2001年6月1日，円回内筋を橈側手根伸筋へ，中指浅指屈筋を総指伸筋，環指浅指屈筋を長母指伸筋へ腱移行術を施行した。術後経過順調，7月24日に職場復帰，10月には不自由なく両手作業可能となり，12月5日の来院時には握力右36.3左17.8kg，左手関節背屈70°，掌屈10°で，患者は十分満足していた。

37. Membranous lipodystrophy の1例

大宮赤十字病院整形外科
 梶田 敦子 (かじた あつこ)
 東医歯大整形外科
 黒田 浩司・阿江 啓介・四宮 謙一

骨折を繰り返し，長年ビタミンD代謝異常として内科的フォローアップをされてきた membranous lipodystrophy の1例を経験し，骨セメントを用いた骨折治療で良好な結果を得たので報告した。症例：39歳女性。20代より四肢の骨折を繰り返し，右足関節骨折で病的骨折を疑われ，当科を紹介され入院となった。入院時，尿失禁と病識の欠如を認め，単純X線像で四肢長管骨の骨端部や足根骨を中心に多発性嚢胞像を認めた。手術は病巣搔爬，腸骨骨移植，骨セメント充填，プレート固定を試行し，搔爬材料の病理組織学的検査で membranous lipodystrophy と診断された。術後8

カ月の現在，杖なし全荷重歩行可能で，右足関節は可動域制限なく良好な経過であった。本症例より，多発する骨嚢腫病変を認める患者では本疾患も念頭に入れて検索することが重要と考えられた。また，骨融解の程度により骨セメント充填を追加することで早期に足関節機能を回復することができた。

38. 猫ひっかき病の5例—MRI 診断

帝京大整形外科
 佐久間行雄 (さくま ゆきお)
 木村 理夫・阿部 哲士・松下 隆

猫ひっかき病は，猫などによる受傷後に多彩な皮膚病変やリンパ節腫脹をきたす疾患であるが，皮膚症状に乏しく軟部腫瘍として紹介された場合，その鑑別が問題となる。初診時に猫との受傷歴が明瞭でない猫ひっかき病におけるMRIの診断意義について検討する。過去10年間に当科で加療した5例（症例1：49歳男性，症例2：49歳女性，症例3：8歳女性，症例4：19歳女性，症例5：47歳男性）のうちMRIを施行した3例（症例3，症例4，症例5）を対象とした。3例とも比較的急性発症の肘周囲の皮下腫瘍を主訴として来院した。MRIではT1強調像で等信号・T2強調像で高信号の腫瘍陰影を呈し，周囲組織に網状構造や浮腫像を認め，化膿性リンパ節炎の所見であった。臨床経過とMRI，猫との接触歴から猫ひっかき病と診断した。経過観察にて3例とも1～2カ月後に腫瘍は自然消退した。今までの診断基準にはMRIは含まれていないが，皮膚症状に乏しい猫ひっかき病の診断において，非侵襲的なMRIは臨床診断上で有用である。

39. 高齢者に発症した恥骨骨髓炎の1例

東女医大整形外科
 佐藤竜一郎 (さとう りゅういちろう)
 加藤 義治・中野 裕貴・和田 圭司
 伊藤 達雄

症例：84歳女性。主訴は右肩径部痛，歩行困難。血液学的には炎症反応を認め，X線，CTにて右恥骨部の骨破壊を認めた。特徴的なMRI所見であり，外閉鎖筋部が高度に造影される反応性炎症像を認めた。これらより恥骨骨髓炎を疑い，病巣搔爬，骨移植術を施行。術後，右肩径部痛は消失，歩行困難も改善された。この症例には，40年前に子宮摘出術の既往があるが，時間的経過から原因と考えにくく，医原性よりも血行性に発症したものと考えられた。